

雲仙岳の火山活動解説資料（令和4年11月）

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

火山活動に特段の変化はありませんが、2010年頃から普賢岳から平成新山直下の深さ1～2km付近を震源とする火山性地震が時々発生していますので、今後の火山活動に留意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1～3、図4-①③⑤）

今期間、白色の噴気が最高で噴気孔上100m（10月：100m）まで上がりました。

14日から16日にかけて実施した現地調査では、前回（2020年11月16日及び2022年5月16日）の観測と同様に平成新山の山頂付近から弱い噴気が上がっているのを確認しました。また、赤外熱映像装置による観測で平成新山の複数の箇所へ地熱域を確認しましたが、前回（2020年11月16日及び2022年5月16日）の観測と比較して地熱域の分布や温度に特段の変化は認められませんでした。

・地震や微動の発生状況（図4-②④⑥、図5）

火山性地震の月回数は13回（10月：13回）と少ない状態で経過しました。震源が求まった火山性地震は普賢岳から平成新山直下の深さ0km付近と1～2km付近に分布しました。2010年頃から普賢岳から平成新山直下の深さ1～2km付近を震源とする火山性地震が時々発生しています。

火山性微動は、2006年11月以降観測されていません。

・地殻変動の状況（図6、図7）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（令和4年12月分）は令和5年1月12日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、雲仙砂防管理センター、九州大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。



図1 雲仙岳 平成新山の状況（11月16日、野岳監視カメラ）

今期間、白色の噴気が最高で噴気孔上100m（10月：100m）まで上がりました。

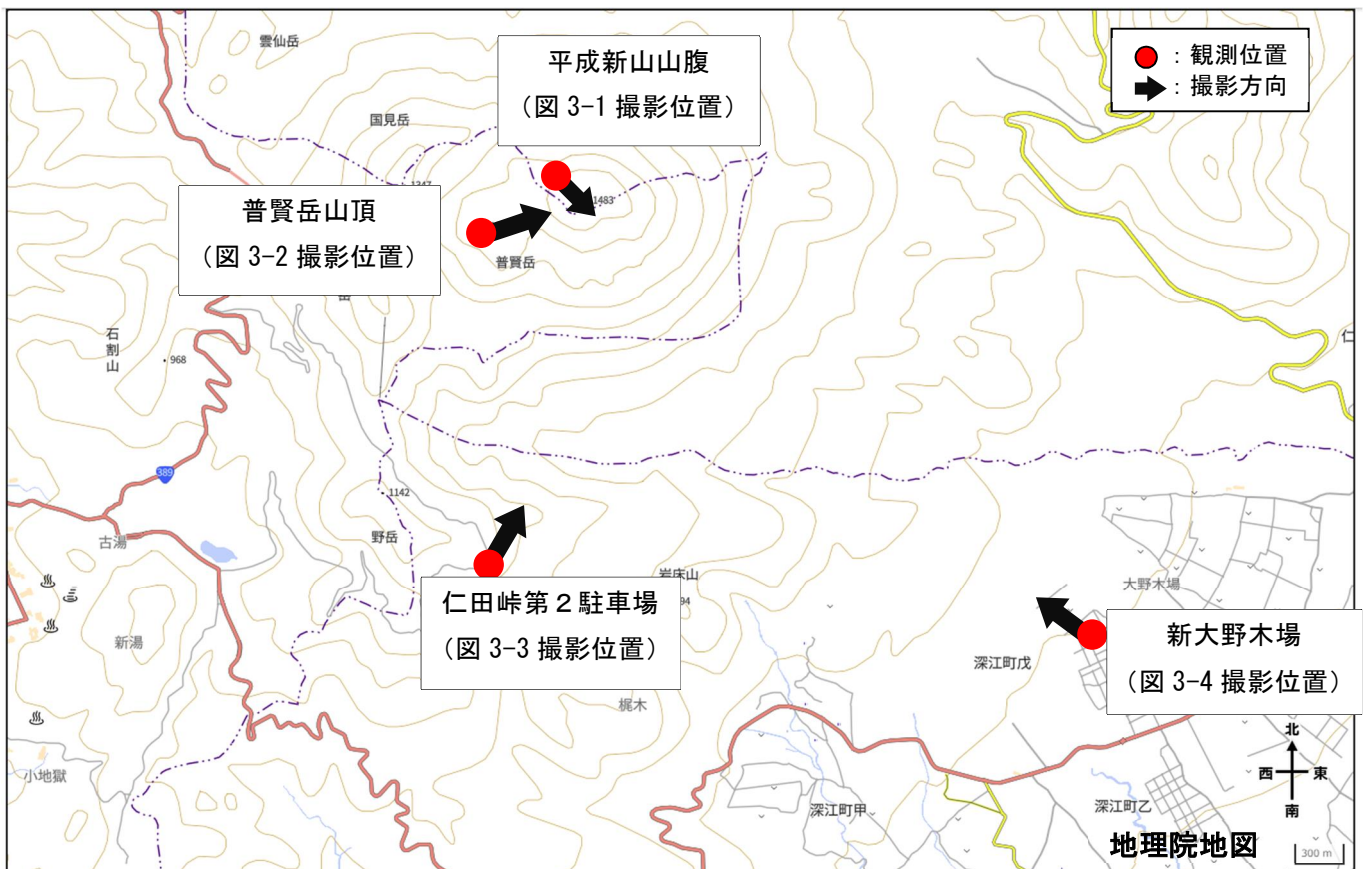


図2 雲仙岳周辺の現地調査観測位置図（観測位置及び撮影方向）

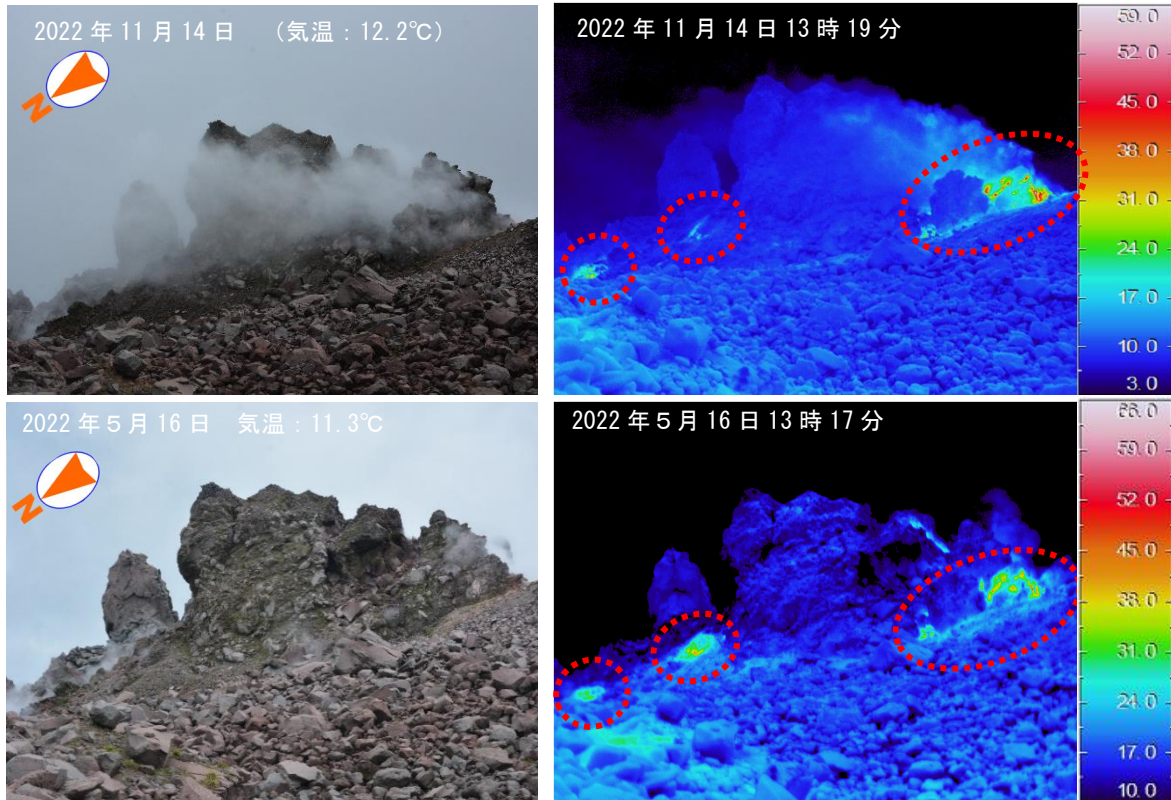


図 3-1 赤外熱映像装置による平成新山の地表面温度分布および可視画像（平成新山山腹から観測）

- ・ 前回（2022年5月16日）の観測と同様に、平成新山の山頂部に複数箇所に地熱域（図中赤丸）を確認しましたが、地熱域の分布や温度に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 前回の観測と同様に、山頂付近から弱い噴気が上がっているのを確認しました。

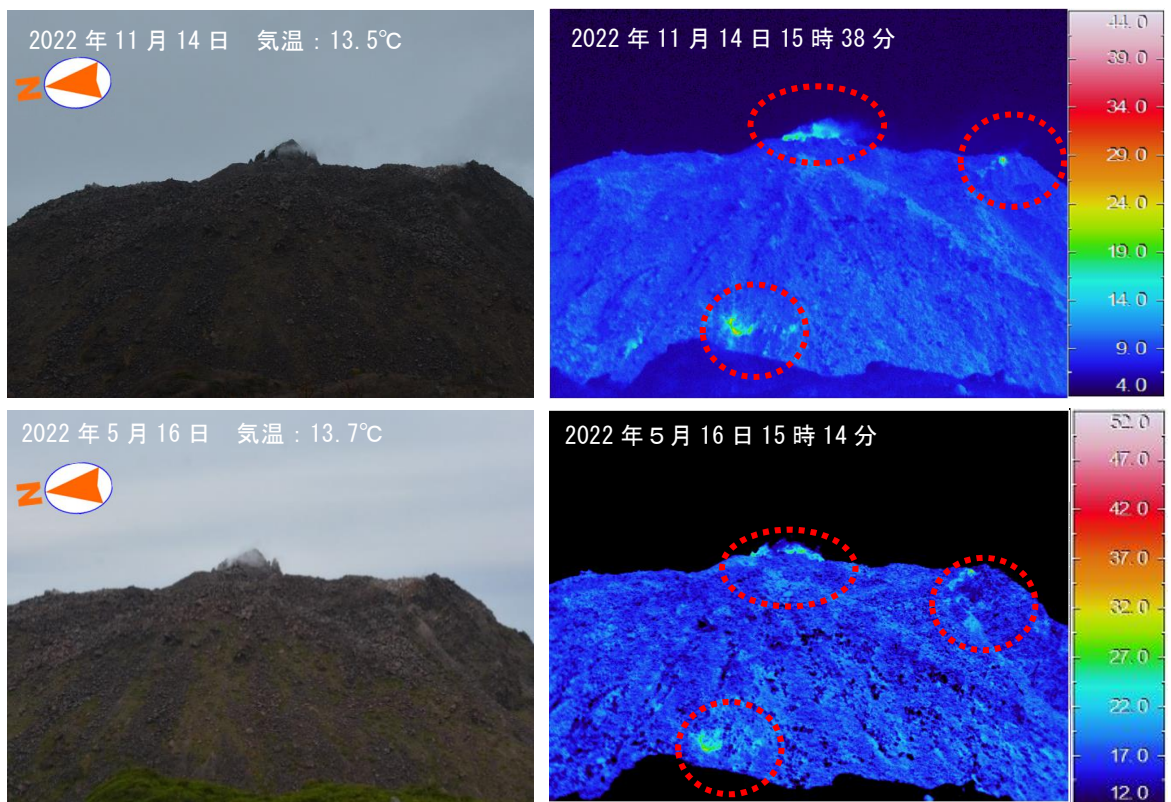


図 3-2 赤外熱映像装置による平成新山の地表面温度分布および可視画像（普賢岳山頂から観測）

- ・ 前回（2022年5月16日）の観測と同様に、平成新山の山頂部に複数箇所に地熱域（図中赤丸）を確認しましたが、特段の変化は認められませんでした。
- ・ 前回の観測と同様に、山頂付近から弱い噴気が上がっているのを確認しました。

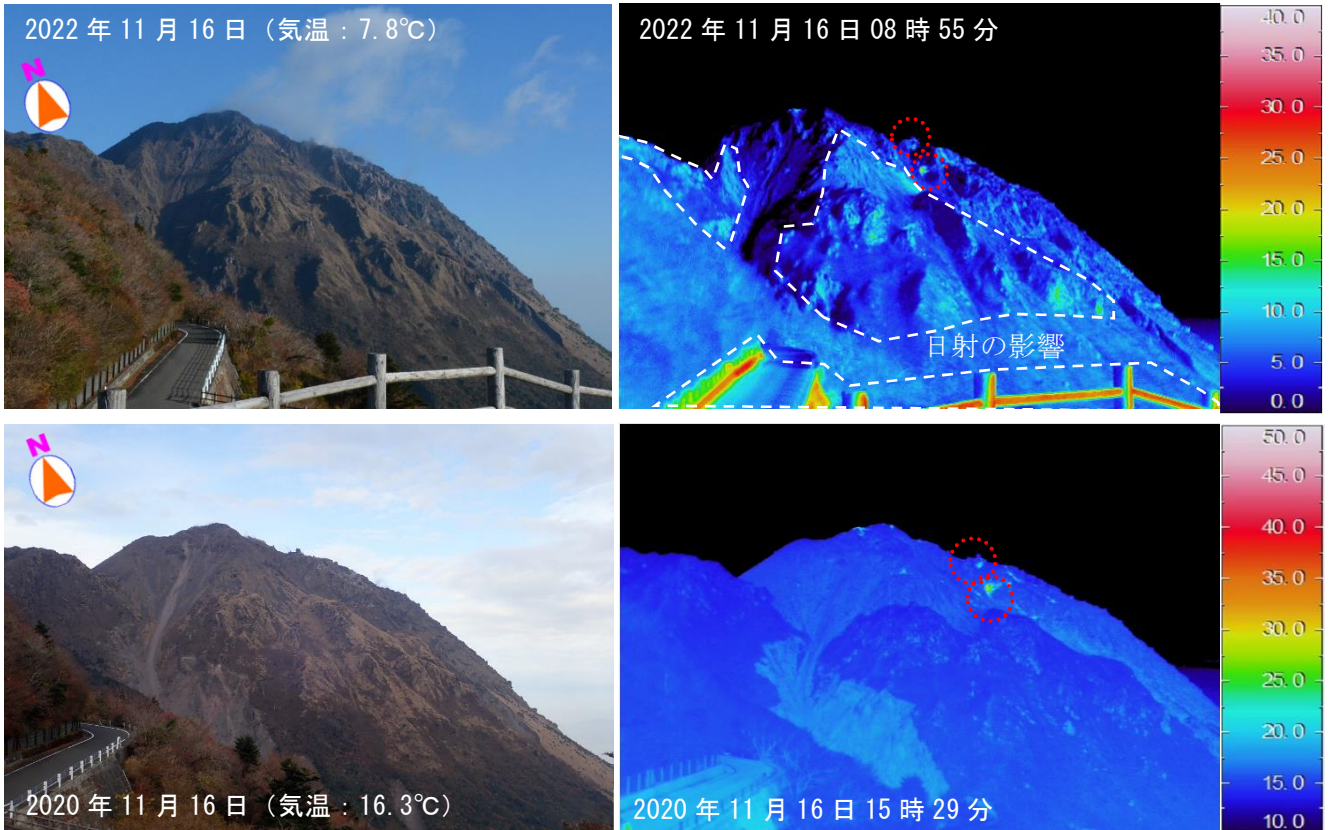


図 3-3 赤外熱映像装置による平成新山の地表面温度分布および可視画像（仁田峠第2展望台から観測）

- ・ 前回（2020年11月16日）の観測と同様に、山頂付近に複数の地熱域（図中赤丸）がみられましたが、地熱域の分布や温度に特段の変化はみられませんでした。
- ・ 山頂付近から弱い噴気が上がっているのを確認しました。

白色点線内は日射の影響を受けています。

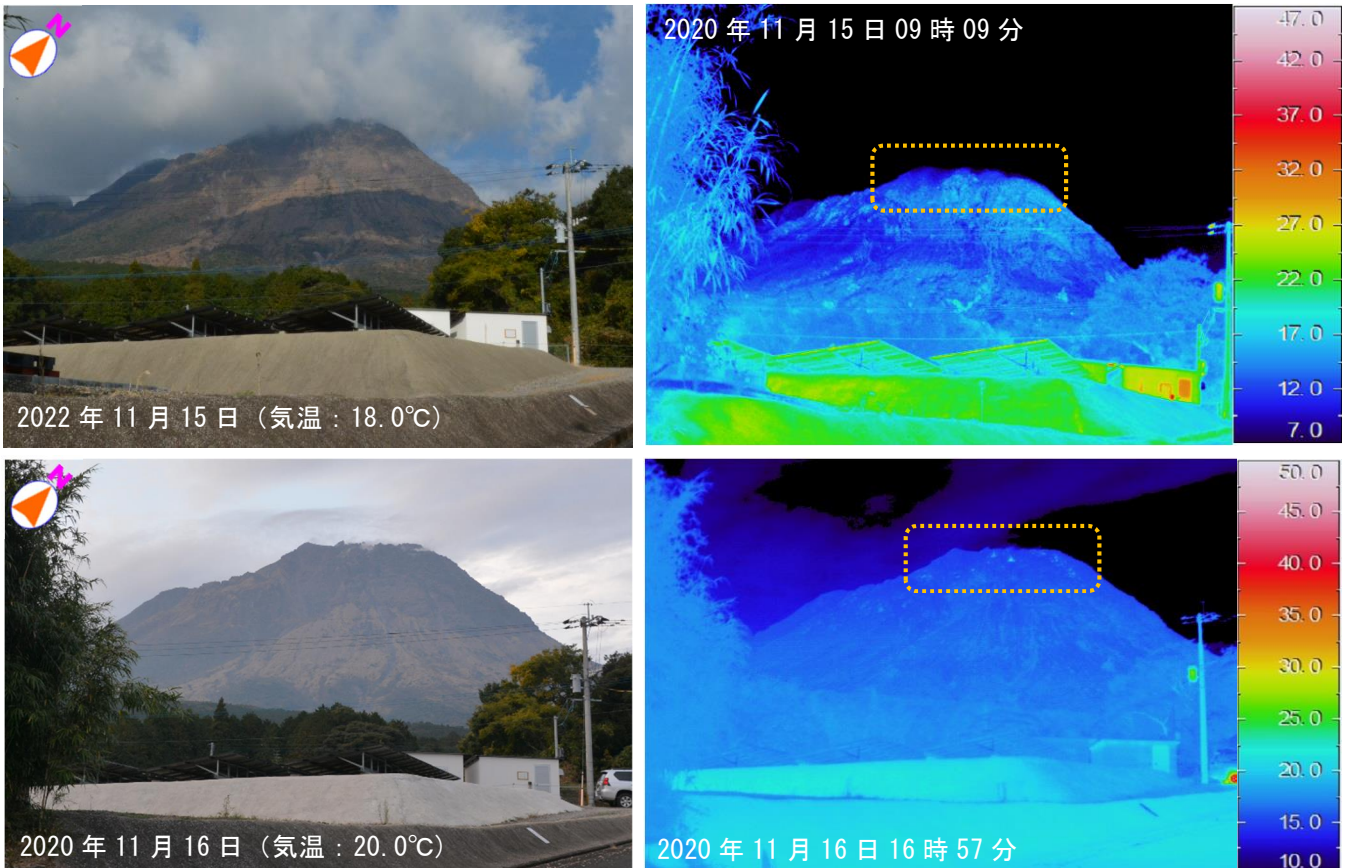


図 3-4 赤外熱映像装置による平成新山の地表面温度分布および可視画像（新大野木場から観測）

- 前回（2020年11月16日）の観測と同様に、山頂付近（黄色枠内）の複数箇所に地熱域がみられましたが、地熱域の分布や温度に特段の変化はみられませんでした。

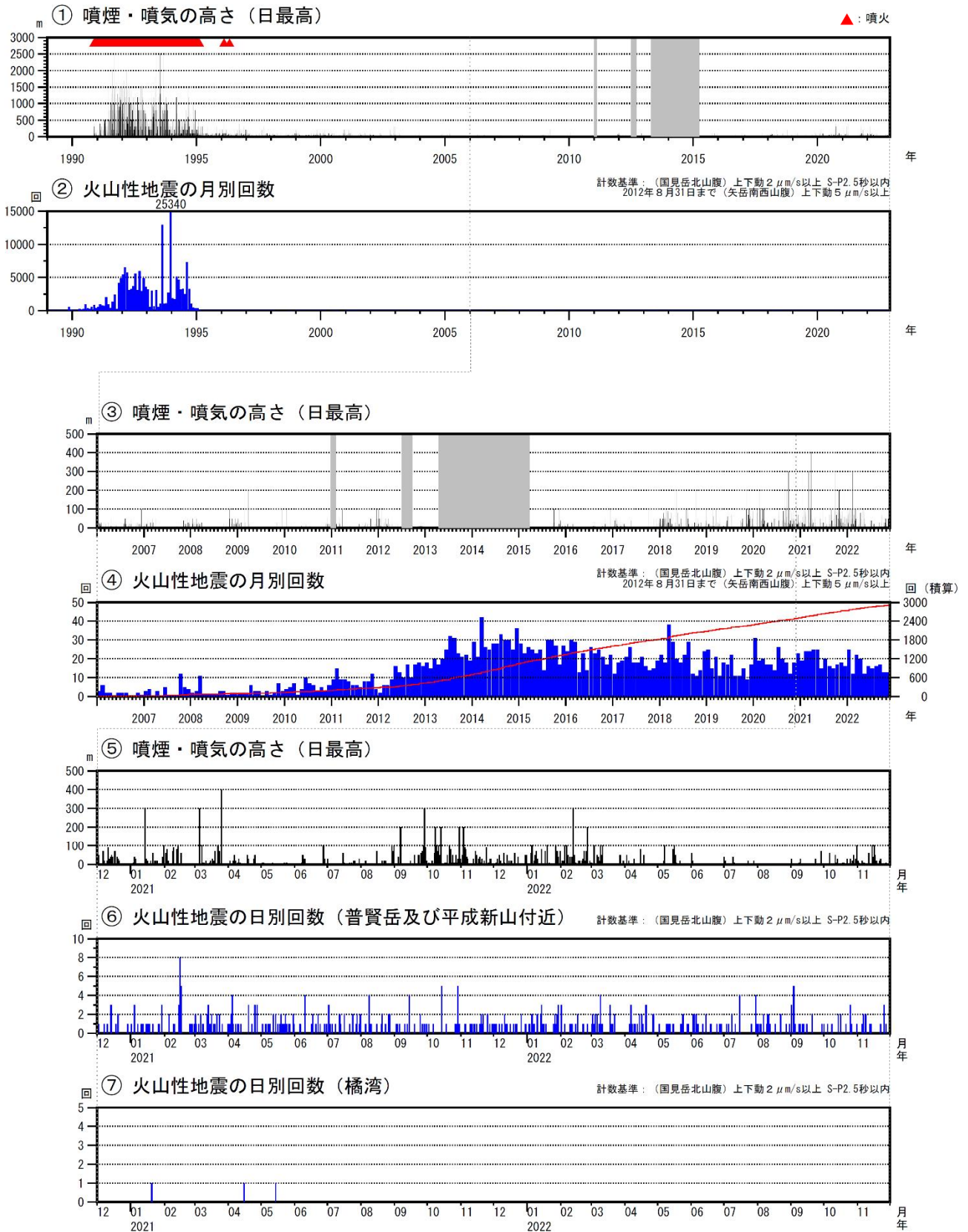


図4 雲仙岳 火山活動経過図（1989年1月～2022年11月）

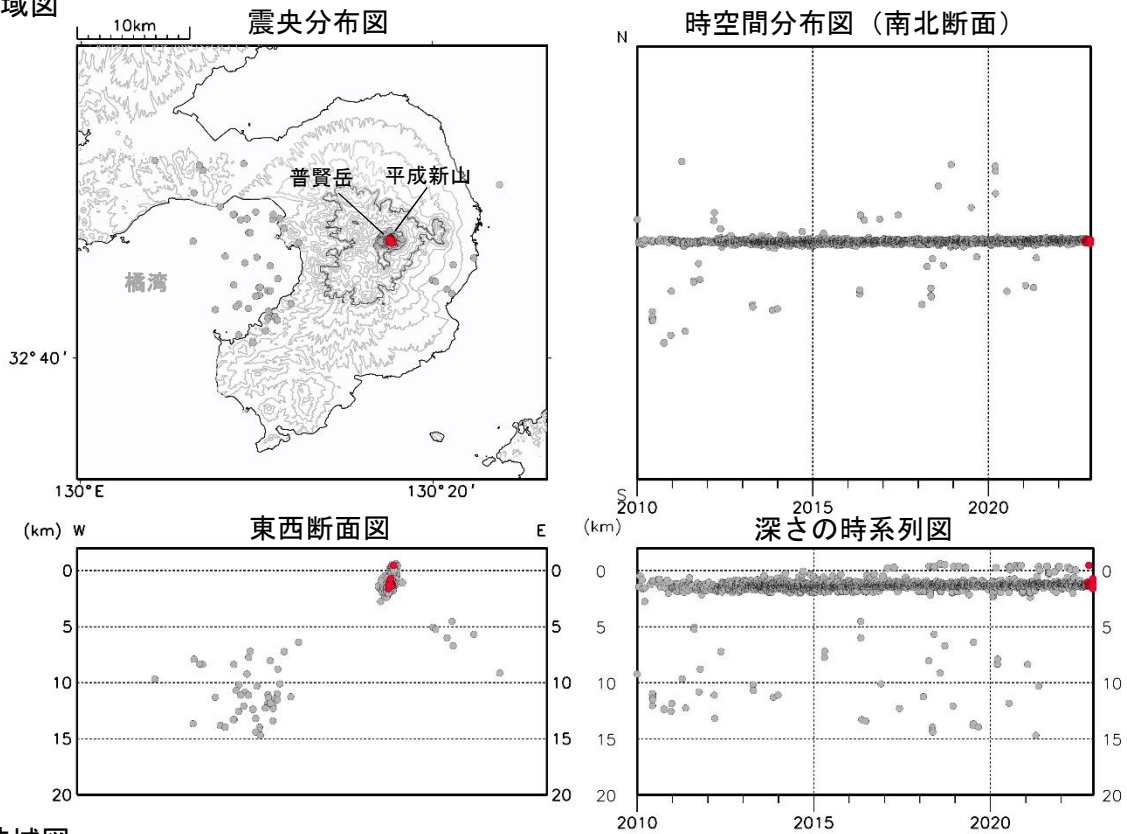
<11月の状況>

- ・ 白色の噴気が最高で噴気孔上100m（10月：100m）まで上がりました。
- ・ 火山性地震の月回数は13回（10月：13回）と少ない状態で経過しました。

灰色部分は監視カメラの障害による欠測を示しています。

④の赤線は地震回数の積算を示しています。

① 広域図



② 狭域図

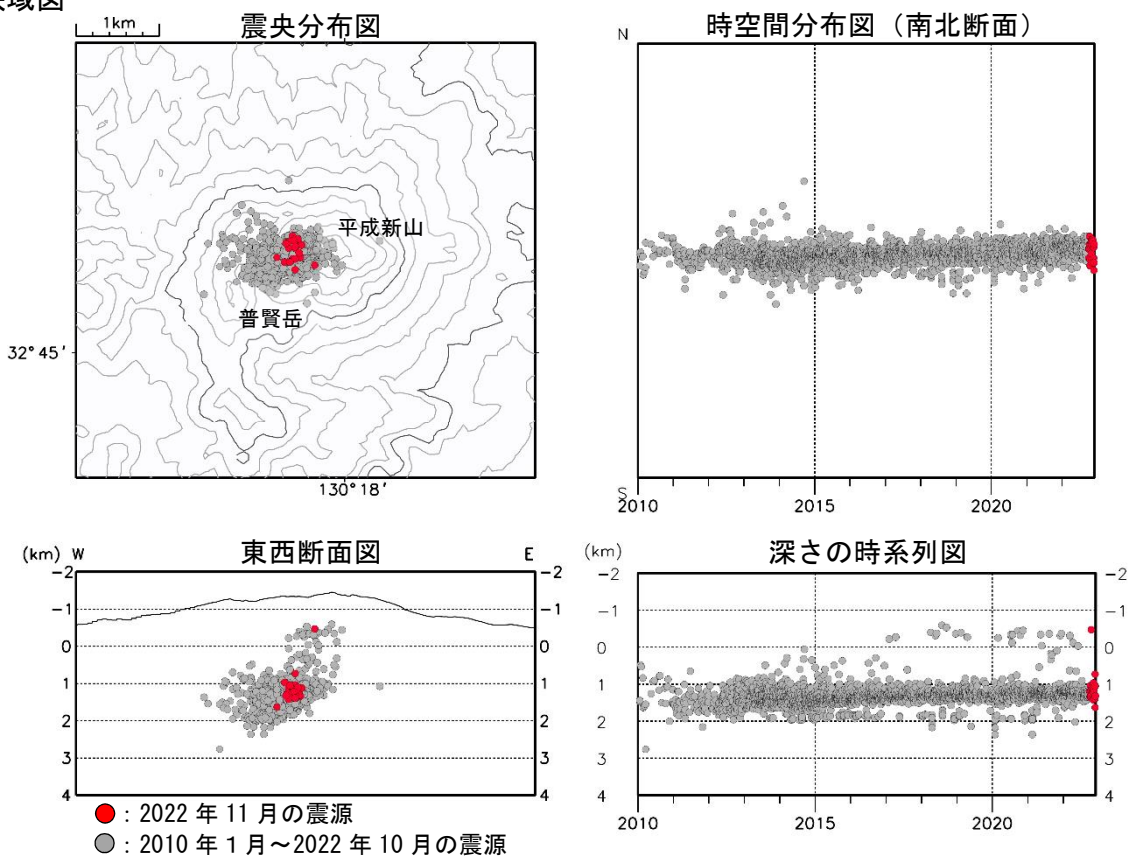


図5 雲仙岳 震源分布図 ①広域図 ②狭域図 (2010年1月～2022年11月)

<11月の状況>

震源が求まった火山性地震は普賢岳から平成新山直下の深さ0 km付近と1～2 km付近に分布しました。

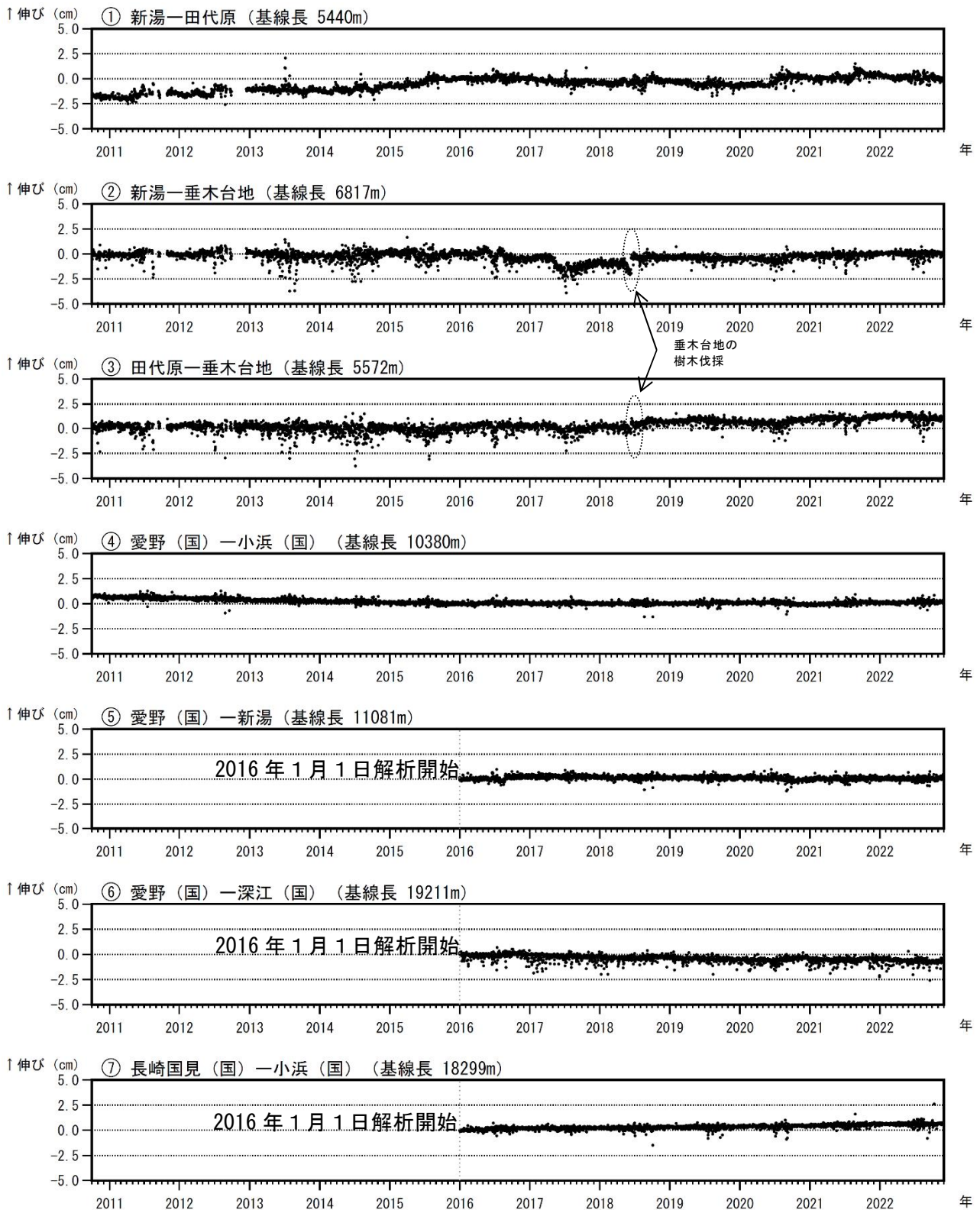


図6 雲仙岳 GNSS連続観測による基線長変化（2010年10月～2022年11月）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。

これらの基線は図7の①～⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

基線④については、2015年以前のデータは国土地理院の解析結果（F3解）を使用しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年（2016年）熊本地震の影響による変動が大きかったため、この地震に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院

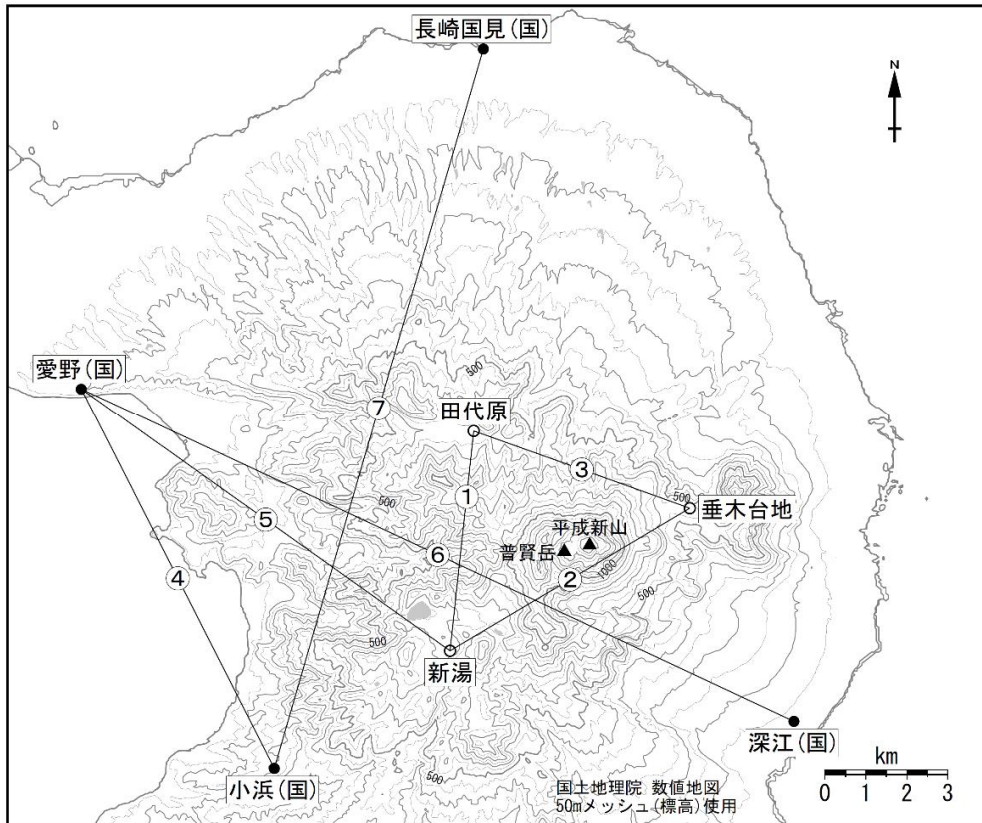


図7 雲仙岳 GNSS連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院

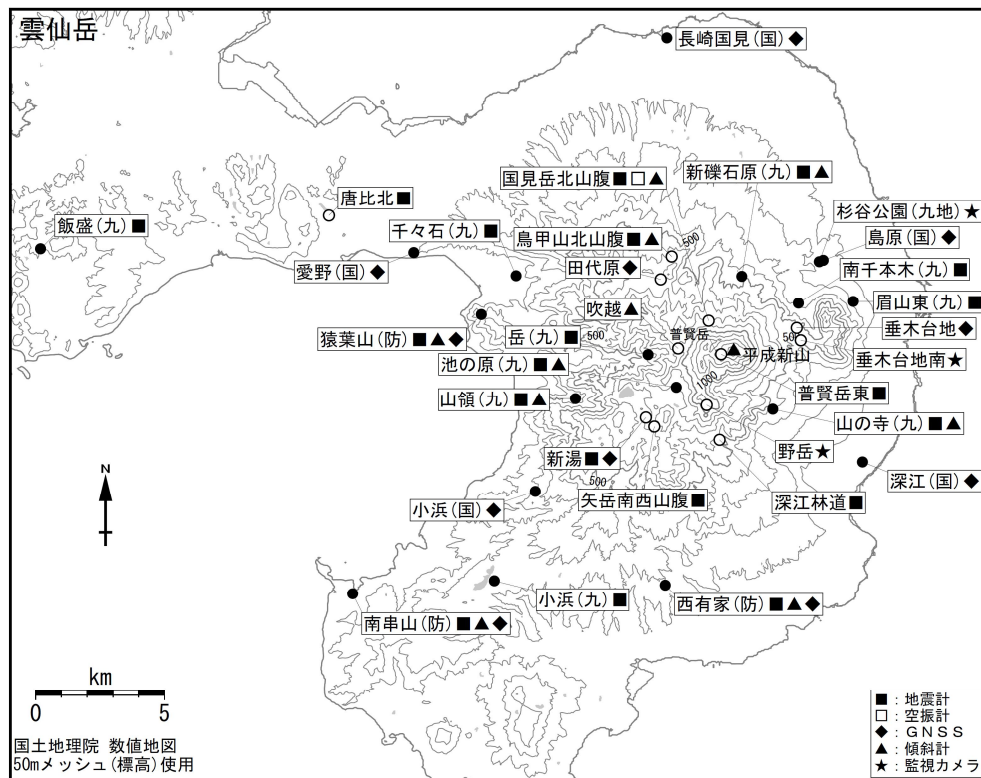


図8 雲仙岳 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院、(九) : 九州大学、(防) : 防災科学技術研究所、(九地) : 九州地方整備局 (雲仙砂防管理センター)